

研究ノート

セガンティーニの「悪しき母」と「ニルヴァーナ」の詩

池田有紀子

はじめに

「悪しき母」伊 *Le cattive madri*, 独 *Die bösen Mütter* (1894) は、アルプスの風景画で知られるイタリア生まれの画家、ジョヴァンニ・セガンティーニ *Giovanni Segantini* (1858-1899) によって描かれた作品である。現在この絵画はウィーンのベルヴェデーレ美術館 *Museum Belvedere* に所蔵されている。

この絵には広い雪景色の中に女性と乳飲み子が描かれている。前景には枯れた木の幹と一体となった女性がいる。彼女は枝に手を伸ばしているのだが、その枝の先は乳飲み子の顔になっている。赤ちゃんは苦しげな表情でこの女性の乳を吸っている。目を閉じた女の表情は、平安とも苦悶ともとれる。背景の左側には繋がった女と子のシルエットが描かれている。これは前景の母子像よりも激しい動きを感じさせる、まるで悶え苦しんでいるかのようである。その後にも女性のシルエットが描かれている。

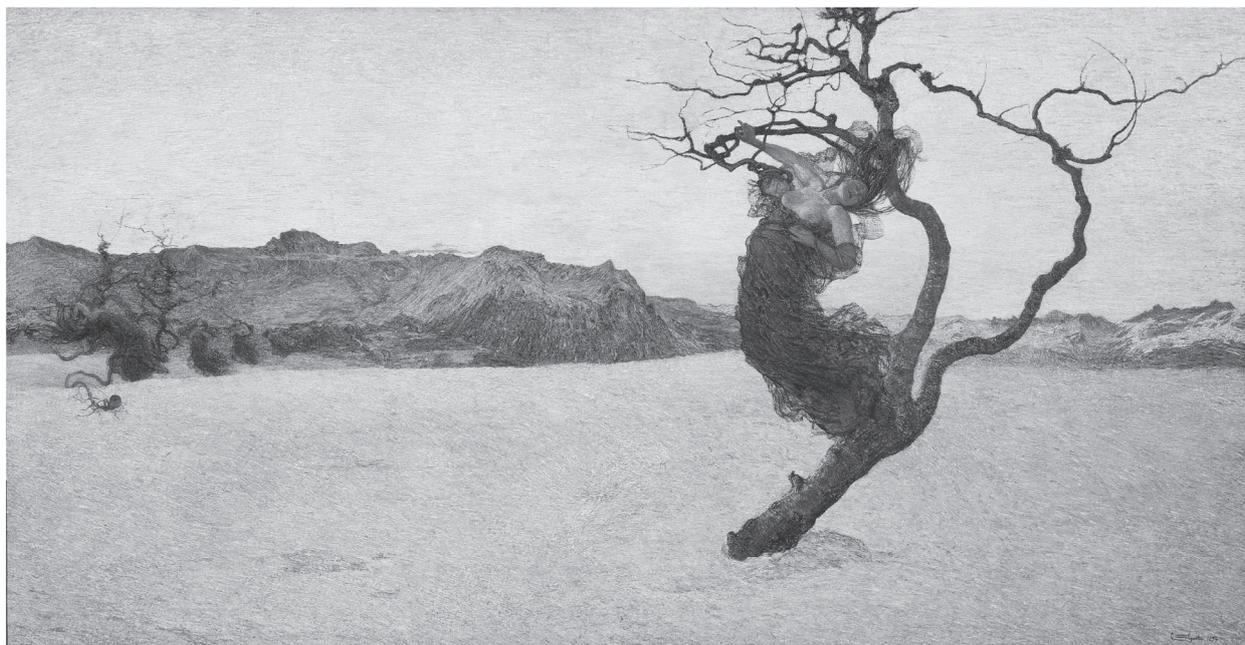
この作品は白銀の美しい自然の風景の中に、神話の一場面であるかのような母子の姿を登場させ、見る者の心に衝撃を与える。鑑賞者は思わずこの絵画の意味を問いたくなるであろう。本論は、この絵画作品に描かれている物語を調べ、まとめたものである。調査過程と結論を記すことで、この作品の理解に僅かではあるが貢献したい。

絵画をめぐる物語

ベルヴェデーレ美術館の解説によれば、絵画「悪しき母」のモチーフは12世紀の修道士ルイジ・イリカ¹⁾がサンスクリットからラテン語に翻訳した仏教説話に由来する。この絵は浄化の過程であり、女性は平安の表情で浄化の最終過程に至っていると述べられている。

一方、リヴァプール美術館 (*Walker Art Gallery*) に所蔵される、「悪しき母」の連作とされる「淫蕩な女たちの懲罰」*Il castigo delle lussuriose* (1891) は「ニルヴァーナ」*Nirvana* という別名がある。この美術館はこの作品を12世紀の僧、ルイジ・イリカ *Luigi Illica* がインドの詩「パンジャヴァーリ」*Panghiavari* を模倣して作った「ニルヴァーナ」という作品から靈感を得たものと解説している²⁾。

情報を整理すると、「悪しき母」のイメージの源泉として流布している説は、ルイジ・イリカという12世紀の僧侶が翻訳した仏教詩の中の「ニルヴァーナ」ということになる。以下で、この通説を吟味する。



© Belvedere, Wien

悪しき母 Die bösen Mütter (1894)

詩をめぐる物語

ルイージ・イッリカ Luigi Illica (1857-1919) は僧侶でも中世の人物でもなく、セガンティーニの友人であり、プッチーニのオペラ「トスカ」や「蝶々夫人」のテキストを書いた劇作家である。つまり、通説は誤謬であったといえる。この通説が生まれた経緯と、事実である「悪しき母」のモチーフの源泉を見ていきたい。

結論から言えば、「ニルヴァーナ」という詩は翻訳ではなく、イッリカの独自の作品である。けれどもこの作品は仏教詩からの翻訳という形で発表された。

ウィーン的美術史研究者ハマー＝チューゲントハット (1985)³⁾ はクインサックの研究に依拠して、「ニルヴァーナ」をイッリカ独自の作品として結論付けている。クインサックはセガンティーニ研究の専門家であり鑑定家でもある。本研究も最も信頼性の高い資料として、クインサックの成果に多くの点で頼っている。彼女が編集したセガンティーニの書簡集の中に、この絵画と詩に関連する記述がある。

1895年5月下旬にセガンティーニはミラノの画商アルベルト・グルビシーにこのように書いている。

親愛なるアルベルト

イッリカの素晴らしいニルヴァーナを同封するよ。絵を複製した雑誌にこのコピーを送ってくれ。展覧会の委員会にもコピーを送ってほしい、そうしたら委員会は絵の隣にこの詩を掛けることができるだろう。コピーを一通君が持っていてくれ、そして原本を僕に返してくれ。インド人として通るように署名には十分気を付けてほしい。
.....

セガンティーニより⁴⁾

この書簡で述べられている雑誌はベルリンの美術文芸雑誌『パン』Panである。この第3号に「悪しき母」は掲載された⁵⁾。クインサックによると、「ニルヴァーナ」を書いたのはイッリカであるが、この詩は当時の文芸作品の流行でインド詩人マイラポンダ Mairaponda の仏教歌集「パンジャヴァーリ」Panghiavari の一部の翻訳という風にして公にされた。

同じ年の6月1日に書かれた手紙からもイッリカの詩についての情報を得ることができる。

親愛なるアルベルト

……絵の解説(図版)を掲載する雑誌にイッリカの詩を載せるべきだ。主題を理解しやすくするためだ。何ら見るものもない他の雑誌に載せるのではだめだ。イッリカの名前は書かれてはいけない、翻訳者としても彼の名前は出されてはいけない、というのもこの詩は存在しないからだ、……⁶⁾

これらの書簡からわかることは、セガンティーニが絵画をイッリカの詩とともに鑑賞されることを望んでいたということ、そしてその詩がイッリカの名前を出さずにインドの詩の翻訳として読まれるように配慮した、ということである。従って、「ニルヴァーナ」をインドの仏教詩とみなす通説は、完全な誤りとして否定することはできない。なぜなら、画家はこのような背景を絵画に与えることを望み、インドの仏教詩というインスピレーションの源泉を鑑賞者に与えようとしたからである。

詩の情景と絵画

イッリカの「ニルヴァーナ」のテキストはクインサックが編集したセガンティーニの書簡集の注釈に全30連が掲載されている⁷⁾。このテキストから詩の情景を描き出すことを試みる。

Là su, ne l'infinito spazio ceruleo, — Nirvana irradia! —
 Là, dietro a li aspri monti e a balze grigie, — splende Nirvana! —
 Là tutto è azzuro, è eterno, è riso, è cantico! — È la Nirvana! —
 Là le gran spemi de li umani adergono, — dove è Nirvana! —
 e chi soffrì e peccò ha pace e oblio. — Tale è Nirvana,
 Oh, umana questa Fede che dimentica — e che perdona! —⁸⁾

あれ 彼に見ゆ 高き^あに在るは ニルヴァーナ
 果てなき 天なる^{あめ}彼の^か地と輝けり
 荒れすさぶ 山々と 暗き崖
 その彼方 煌めくは ニルヴァーナ
 ものみな蒼く 永遠^{とわ}となり 微笑^{ほほえ}みあふれ
 賛美^みの歌満つ 彼の地はニルヴァーナ
 人の大いなる望み 生まれ出づる

其の地はニルヴァーナ
 苦しみ受けし者 罪を犯せし者ら 安らぎと忘却に憩う
 さにあるは ニルヴァーナ
 ああ、情け深き信仰よ
 罪を忘れ許したまう信仰よ

ここまではニルヴァーナがどこにあり、どのような場所かということが語られている。ニルヴァーナは空高くに、荒涼とした山々の後に、輝いて果てしなく広がっている。そこではものみな空の色である青で、永遠で、微笑みで、賛歌という喜びと希望に満ちた空間である。そこでは罪人が平安 *pace* を得ることができる。罪人が安らぎを得るのは人間の信仰によってである。人が罪を犯した者の過ちを忘れて許す、ということによって罪人は救われニルヴァーナに憩うことができる。

Pur chi ha peccato, pria di quel dolcissimo — riso di Luce,
 de la Natura dee soffrir le angosce — e con Lei piangere.
 Le cose a guisa degli umani han lacrime — ed hanno colpe.
 Così la Mala Madre in vallea livida — per ghiacci eterni
 dove non ramo inverda o fiore sboccia — gira sospinta.⁹⁾

されど罪を犯せし者、
 光の甘美なる笑み受くる前
 自然によりて罰さるる、女神の如き女らは
 自然と共に泣き叫ぶ
 森羅万象 人の如く
 涙あらば罪もまたあらん
 かくて悪しき母
 氷とけぬ薄暗き谷で
 枝、芽吹かず 花、咲かぬ地で
 追い回され 彷徨い歩く

ニルヴァーナの説明の後に、罪人がどのように扱われるのかが語られる。罪人はニルヴァーナに憩う前に、罰せられる。もし「自然」 *la Natura* を「本性」や「性質」と解釈すると、「本性」が理由で罪人たる女神たちは苦しみを受けて、その悪しき「性質」とともに罰されて苦しむ、という風に考えることができる。「女神たち」にあたる *dee* は「美女たち」と訳すこともでき、罪人が女神のように美しい女性であると解釈することができる。

Non ebbe un riso, un sol bacio il tuo figlio, — o invano madre?
 Non diè germogli di tuoi baci l'anima, — o invano madre?
 Così te la tormenta del silenzio — mena e sospinge
 gelida larva con ne li occhi lacrime — fatte di ghiaccio!

Vedetela! Affannosamente vagola — come una foglia!...
 E intorno al suo dolor tutto è silenzio; — taccion le cose.¹⁰⁾

ただ^{ひとたび}一度の微笑みも 　ただ^{ひとたび}一度の口づけも
 　　^{なれ}汝の息子には与えられじ
 　　——ああ、甲斐なき母よ
 汝の接吻を受けて育つ若枝を 　魂は汝に与えしものを
 　　——ああ、甲斐なき母よ
 故に 　音なき吹雪が
 　　汝を打ちたたく
 凍てついた亡霊 　その目には
 　　水の涙
 女を見よ。まるで木の葉のように
 　　あてどない
 静寂が女の苦しみを取り囲み
 　　沈黙が支配する

悪い母の罪は、息子に一度も笑いかけず、口づけすることもなかったこと、つまり、愛情を注いで世話することがなかったことである。音もなく吹雪が彼女に暴力をふるい、追いかける。彼女は風に翻弄される木の葉のように、なすすべもなく哀れな姿になっている。彼女は静寂の支配する音も時間もない世界で、救い出されるという希望なく永遠の罰を受け苦しんでいる。「森羅万象 人の如く 涙ある」世界ではあるが、彼女を取り囲むもの全ては沈黙を選んでいる。

Or ecco fuori della valle livida — appaion alberi! —
 Là da ogni ramo chiama forte un'anima — che pena ed ama;
 ed il silenzio è vinto e la umanissima — voce che dice: —
 Vieni! A me vieni, o madre! Vieni e porgimi — il sen, la vita.
 Vien, madre!... Ho perdonato!... La fantasima — al dolce grido
 vola disiosa e porge al ramo tremulo — il seno, l'anima.—
 Oh, portento! — Guardate! Il ramo palpita! — Il ramo ha vita!
 Ecco! È il viso d'un bimbo, e il seno succhia — avido e bacia!——¹¹⁾

されど暗き谷の外れに
 　　木々 現れん
 枝々こぞりて或る魂を呼び求む
 　　子を育て慈しむ魂を
 かくして静寂は敗れ去り
 　　情け深き声 こだまする
 来たれ、我のもとへ、母よ。来たりて、我に与えたまえ、

乳房、命を
 来たれ、我 母を許せし
 愛しき叫び声に向かい
 女の影 飛び行きて 木の枝に 乳を与えん
 乳房、魂を
 ああ、ありうべからずや
 見よ、枝は脈打ち、
 産声あげる
 見よ、赤子の顔が乳房吸う
 むしゃぶり口づけん

悪い母は救いのない世界で罰を受け苦しんでいる。そこに木々が谷の外れに現れ、木の枝々は母の魂を呼んでいる。谷は罰を受ける場所なので、救いの手を差し伸べる木々は谷の外れに現れたと考えられる。母に救いをもたらそうとする木は、音のない世界にいる母に声を届けようとする。声は沈黙に勝ち、枝の声が母に届く。亡霊は声のする木へと急ぎ、乳房という命を枝に与える。命を与えられた枝は鼓動を打ち始め、赤子の顔になって母の乳房をむさぼる。

Poi bimbo e madre il grigio albero lascia — cadere avvinti...
 Là su Nirvana irradia! Là su il figlio — con seco tragge
 la perdonata Madre... I monti varcano — le due fantasime!...
 Varcan l'angoscia de le nubi e volano — dove è Nirvana. —
 Oh, umana questa fede che dimentica — e che perdona.¹²⁾

赤子と母 灰色の木より解き放たれ
 抱き合いて 降ろさるる
 空高く 煌めくはニルヴァーナ 彼方に見ゆる
 乳飲み子 抱きて導かん
 許されし母を
 山々を渡る 二つの影
 苦悩の雲越え 昇りゆく
 彼の地は ニルヴァーナ
 ああ 情け深き 信仰よ
 忘れ去り 許したまう この信仰よ

木の枝に繋がった子に母は乳を与える。二人は解放されて、木から降ろされる。詩の語り手の視線は再び空高くにあるニルヴァーナへと移る。遙か彼方に見えるのは、赤ちゃんが母親を救い出しニルヴァーナへと連れていく様子である。母子はニルヴァーナに至る。そこへ連れて行ったのは、他でもない幼子の情け深い umana 信仰 fede である。その信仰とは、母の過ちを忘れて、許すというものである。

情け深い信仰とは人の罪を忘れて許すこと、それによってはじめて罪の被害者も罪を犯した人も救われる、という宗教観をこの詩から読み取ることもできる。しかし、ここで詩を取り上げた目的は、絵画の場面を理解するため、詩の情景を描き直すためである。従って、目的を超えた詩の解釈には踏み込まないことにする。

詩の情景を絵に重ねて解説したものに、チューリッヒ美術館 Kunsthaus Zürich から出版されたセガンティーニの作品集¹³⁾がある。この作品集の解説は大部分がクインサックによって書かれたものである¹⁴⁾。この解説によると、「悪しき母」という一つの作品にはイッリカの「ニルヴァーナ」全てが描かれている、と見ることができる。この物語は苦しみと救いの二つの要素から成っており、画面の前景は罰を受ける不毛の地で、背景にある山々と空は救いの場のニルヴァーナを表現している。画面左側の三つのシルエットについても解釈がなされている。最も左側の赤子と女が繋がったシルエットは、母が谷で苦しみを受けている様子と、そして子の声が静寂を破る様子が氷を突き破って現れる姿で表現されている。つまり、この生々しいシルエットは、母が沈黙の中で苦しみ続ける場面から、子の声が母に届く場面までの表現と見ることができる。その右後ろの小さな二つのシルエットは赤子を抱いた、許された母といえる。木から降ろされた母子の姿である。そして画面の右手に大きく描かれた母子の木は、罪の贖いから救済までを一人の女性の姿で表現し母子の「両価的な結合」ambivalente Vereinigungを表していると考えられる。しかしこの解説は、セガンティーニが一人の女性によって、苦しみから救いまでを表現したのかどうかは、書簡には情報がないと述べている。一人の中心的モチーフによって罰と救いを描いたか、それとも複数の女性に分けて表現したのか、両方の解釈の可能性が開かれたまま残されている¹⁵⁾。

アルベリコの幻視

フレーナーの研究(2009)は「ニルヴァーナ」に明確なモチーフの源泉があることを指摘している。彼によると詩の源泉は、12世紀のイタリア人修道士、アルベリコ・ディ・セッテフラティ(伊 Alberico di Settefrati, 独 Alberich von Settefrati)の幻視にある。フレーナーはこう述べている。

この陰鬱な詩、一種のゲーテの「魔王」のパラフレーズの源泉は仏教的なイメージから取られたのではなく、12世紀のベネディクト会の僧侶、アルベリコ・ディ・セッテフラティの幻視にある。そのような詩からセガンティーニは最良の絵画構成の靈感を得た。¹⁶⁾

フレーナーの研究の中では、アルベリコの幻視についてはこれ以上触れられていない。しかし、「悪しき母」と「ニルヴァーナ」のイメージの源を探るという意味で、この幻視について若干の記述を加えたい。

アルベリコ(12世紀中頃)は9歳の時に幻視(Jenseitsvision)を見た。イタリア、モンテカッシーノのベネディクト会修道院で司祭叙階を受けた後、彼の幻視は別の司祭によって書き記された¹⁷⁾。幻視の中で幼子アルベリコは使徒ペトロと二人の天使に付き添われ、死後の世界を見る。そこで彼

は罪人たちが罰されている様子を目にする。幻視の第4章に自分の子供の世話をしなかった女への罰が描かれている。自分の子供に乳をやらなかった、もしくはごまかして子供の世話をしているふりをしようとした女たちは、赤子に乳をやらずに殺したことになる、このような行いをしておきながら罪悪感を抱かない女は、乳房に穴をあけられ尖った木に吊るされる罰を受ける。子供に乳を与えなかった母が木に吊るされて罰されている姿は「悪しき母」の絵と重なる。

「悪しき母」をめぐる通説で、「ニルヴァーナ」が12世紀の僧侶によって翻訳された詩である、という点は、アルペリコの幻視に関する情報がこの絵画に混入されたためではないかと思われる。ル・ゴフは『煉獄の誕生』¹⁸⁾の中で、修道士アルペリコの幻視はベネディクト修道会の生活の影響を受けていることを指摘している。ベネディクト会は6世紀にイタリアで始まった修道会である。この幻視と絵画のモチーフの重なりから言えることは、「悪しき母」は仏教的というより、キリスト教的な作品だということである。

まとめ

「悪しき母」に描かれている場面は何であるのか、という最初の問いに立ち返ると、そこに描かれていたのは、イッリカの「ニルヴァーナ」の物語であった。この物語は詩の情景ですでに述べた通り、子に愛情を注がなかった悪しき母は罰に苦しむが、子の許しにより救われ、子と共に天なるニルヴァーナに昇る、というものであった。この詩によって、絵画の物語を捉えることができ、絵画「悪しき母」についての議論の下地を準備することができたと考える。また、最終的に絵画の母子が救われるということを詩から見出し、鑑賞者もまた救われたような気持ちになると思われる。しかし物語を把握したとしても、筆者がこの絵画から受ける衝撃は変わらなかった。この衝撃は詩のストーリーを越えてセガンティーニが表現した世界から来ると言わざるを得ない。クインサック¹⁹⁾が指摘するように、この絵が一人の女性の処罰と救済——苦しみと至福——の両方の瞬間を表しているからかもしれない。そして、それに加えて述べるならば、母の乳房を吸う子は苦しんでいるような切ない表情をしており、見る者はこの子に何が起こったのかと案じずにはおれない。この子どもは悪い母の被害者で、今で言うならば、育児放棄という虐待にあって、おそらく命を失った子である。母の愛に飢え、実際の飢餓感に苦しみ、両方の意味で母の胸を求めていた。しかし、必死に乳房にすがりつく子の顔は、母を苦しめているようにも見える。母はこの子を受け入れているのか、拒んでいるのか、枝に伸ばされた手からは判断がつかない。一般的に、乳児が母の乳房を吸う場面は、安堵した子の表情を想起させる。ただならぬ表情をしたこの子によって、この絵は緊迫したものになっているように思われる。母が苦しみと平安の両方を表し得るのであれば、この子にも苦しみと救いの瞬間が——母の愛と世話の欠如に苦しんでいた時と、そして、ようやくそれらを得た時の両方が——表現されているのかもしれない。そして、おそらく、子は苦しむ母を救おうと必死なのではないだろうか。冷たい吹雪の責め苦から、何とかして母を救い出そうとしているのかもしれない。

詩からは説明できないこの絵画の不思議な引力に関してもう一つ言えることがある。この絵の持つ不思議は、アルプスの冬景色という「自然」の中に母性を放棄した母という「不自然」、あるいは「反自然」というテーマが木という自然に宿され描かれていることにある。大きな自然の理の中で生きる自然（木）に、反自然があたかも自然の如く美しく描写されていることに、違和感と不気味さを

覚えるのかもしれない。そして、その美しさ故に、この風景は凄絶な不協和音を奏で、見る者の心を掻き立てるのではないだろうか。

最後に、もし、本論の目的が「悪しき母」の解釈であったなら、目的は果たされていない。けれども、本論の目的は「悪しき母」の基となった物語を見つけ出すことであった。単純素朴な研究目的ではあったが、「ニルヴァーナ」の全文を原文で提示し、詩の情景を描写できたことで目的に達したのと考えられる。というのも、本研究の結果から翻って見ると、「ニルヴァーナ」の詩は「悪しき母」に関心を持った日本の鑑賞者に開かれているとは言えない状況であった。セガンティーニが「悪しき母」を「ニルヴァーナ」と共に鑑賞されることを望み、この詩によって絵画が理解されることを望んだことから、この詩の全文が紹介される必要があったと考える。

引用文献、注

- 1) バルヴェデーレ美術館の日本語音声ガイドによる
音声ガイドの中で修道士の名前は「ルイジ・イリカ」と発音されていたので、ここでは、その発音に従って表記した。
- 2) リヴァプール美術館のホームページより
<http://www.liverpoolmusems.org.uk/walker/collections/19c/segantini.aspx>
「淫蕩な女たちの懲罰」は1891-1896年に「悪しき母」というテーマで制作された連作に属する。セガンティーニは「ニルヴァーナ」という、12世紀の僧侶ルイージ・イッリカの詩から靈感を得た。その詩はインドの「パンジャヴァーリ」というテキストの模倣である。
- 3) Daniela Hammer-Tugendhat, Zur Ambivalenz von Thematik und Darstellungsweise am Beispiel von Segantinis „Die bösen Mütter“, *Kritische Berichte*, Heft 3, 1985, S.16.
<https://journals.ub.uni-heidelberg.de/index.php/kb/article/view/11289/5151> (ハイデルベルク大学図書館 デジタル図書館 Universitätsbibliothek Heidelberg Digitale Bibliothek)
- 4) Annie-Paul Quinsac, *Segantini – Trent'anni di vita artistica europea nei carteggi inediti dell'artista e dei suoi mecenati*, Cattaneo Editore, Oggiono, 1985, p.346.
- 5) 『パン』に掲載された「悪しき母」の記事は以下で閲覧可能である。
〔Autor unbekannt〕, Giovanni Segantini, *Pan Heft III IV V*, Berlin, 1895, S.193-195.
http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/pan1895_96_2/0067
http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/pan1895_96_2/0068
http://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/pan1895_96_2/0069 (ハイデルベルク大学図書館 デジタル図書館)
セガンティーニは「悪しき母」の絵と共にイッリカの「ニルヴァーナ」が『パン』誌に掲載されることを望んでいたが、この記事には絵と解説のみで、イッリカの詩は掲載されていない。
- 6) Quinsac, *op.cit.*, p.347.
- 7) Quinsac, *op.cit.*, pp.346-347.
「ニルヴァーナ」の翻訳の際に以下の和訳と独訳を参考にさせて頂いた。参考のために記載する。
尚、独訳は抄訳であり、3-10、13、26-30連が欠けているが、ドイツ語圏の「悪しき母」の研究論文ではこの翻訳が用いられていることが多いように思われる。

・和訳

末吉 雄二、『ジョヴァンニ・セガンティーニの《ニルヴァーナ連作》をめぐる随想』、『日伊文化研究』、第35号、日伊協会、1997年、35 - 36頁。

(1) 遙かなる高みの、その限りなき淡青色の空に、ニルヴァーナは光輝く

- (2) あそこの、険しい山々の彼方、灰色の絶壁の彼方で、ニルヴァーナは煌めいている
- (3) すべてが紺碧であり、永遠であり、微笑であり、頌歌であるところ、そこにニルヴァーナはある
- (4) 人々の大いなる希望がより高く大きく広がるところ、そこがニルヴァーナなのだ
- (5) 苦しみ、罪を犯した者が、安らぎと忘却を得る、ニルヴァーナはそんな所だ
- (6) 悪しき行いを忘れ、その罪を許す、この〈信仰〉の、おお、なんと人間的であることか
- (7) もっとも、罪を犯した者たちは、この〈光〉の、きわめて甘美なる微笑みを見ることができない
- (8) 〈自然〉が蒙る苦痛に、女神たちは苦しみ、〈自然〉とともに泣く
- (9) 事物はみな人間の姿をして、涙を流し、打撃を受ける
- (10) かくて、悪しき母は、鉛色の谷間に、永久の氷の中で
- (11) 枝にみどりの葉もつかず、花も咲かぬところで、追い回されるばかりだ
- (12) わずかの微笑みも、あなたの息子の口づけの一つも無く、母よ、虚しくはないか？
- (13) あなたの口づけで若枝に命を与えることもなく、母よ、虚しくはないか？
- (14) かくて、静寂があなたを苦しめ、あなたを運び去り、あなたを追いたてる
- (15) 凍てついた幼子の目には涙が溢れ、その涙は氷なのだ
- (16) それを見よ、息せききってあてどなくさまよう、—— 一枚の木の葉のように
- (17) 彼女の苦しみの周りには、ただ沈黙があるばかり、すべては押し黙る
- (18) そして今、鉛色の谷のはずれに、数本の樹が現れ
- (19) そのすべての枝が、苦しみ愛する魂を激しく呼びもとめる
- (20) そして、沈黙は打ち破られ、もっとも人間的な声がこう言うだろう
- (21) 来てください、私のもとに、母よ！来てその胸と命を私に下さい
- (22) 来てください、母よ！ あなたを許します それは幻影だったが、その優しい叫び声に
- (23) 身を焦がす母は宙を飛んで、震える枝に、その乳房を、生命を差し出す
- (24) おお、まさに奇跡ではないか、見よ！枝は脈打ち、
- (25) 今、ひとりの赤ん坊の顔が現れ、むさぼるように、乳を吸い、口づけする
- (26) そして赤ん坊と母親は、灰色の樹から放たれ、抱き合ったまま落ちて行く
- (27) 空高く、ニルヴァーナは輝いている！高く、息子は昇っていく
- (28) しっかりと、許された母を引き寄せながら
許された母を抱き 山々を越えて、二つの幻影は昇って行く
- (29) 苦悩の雲を超えて、そして二つの幻影は飛ぶ、—— ニルヴァーナのあるところを
- (30) おお、罪を忘れ、罪を許す、この信仰のなんと人間的であることか！

・独訳

Hammer-Tugendhat, a.a.O., S. 16.

„Dort oben, in den unendlichen Räumen des Himmels / strahlt Nirwana / dort, hinter den strengen Bergen mit grauen Zacken / scheint Nirwana! / (...) So die böse Mutter im eisigen Tal / durch ewige Gletscher / wo kein Ast grünt und keine Blume blüht / schwebt umher. / Kein Lächeln, keinen Kuss bekam dein Sohn / o unnütze Mutter? / So wird das Schweigen dich quälen / schlagen und stoßen / eisige Larve in den Augen Tränen / aus Eis gemacht! / Seht sie an! Mühsam wankt sie / wie ein Blatt!... / Und um ihren Schmerz ist nur Schweigen; / die Dinge schweigen. / Jetzt aus dem eisigen Tal / erscheinen Bäume! / Dort aus jedem Ast ruft laut eine Seele / die leidet und liebt; / und das Schweigen ist besiegt und die so menschliche / Stimme sagt: / „Komm! Komm zu mir, o Mutter! gib mir die Brust, das Leben, ich habe vergeben! ...“ Das Phantasma zu dem süßen Ruf / fliegend eilt und bietet dem zitternden Ast / die Brust, die Seele, / o Wunder! Sieh! Dem Ast schlägt ein Herz! Der Ast hat Leben! Nun! Es ist das Gesicht eines Kindes, das an der Brust saugt / gierig und küsst!...“

8) Quinsac, *op.cit.*, pp.346-347.

9) Quinsac, *op.cit.*, p.347.

- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*
- 13) Daniela Tobler (Hrsg.), *Giovanni Segantini 1858-1899 Kunsthaus Zürich 9. November 1990-3. Februar 1991*, Kunsthaus Zürich, Zürich, 1990.
- 14) この作品集の大多数がクインサックによって書かれ、マグナグアンド Guido Magnaguando によって加筆、編集されたものである。Tobler (Hrsg.), a.a.O., S.61.
- 15) クインサックによるとウィーンの「悪しき母」(1894) は詩全体を表しており、罰を受けている瞬間だけでなく、救われている瞬間も表現している。Quinsac, *op.cit.*, p.346.
- 16) Matthias Frehner, *Der Engel des Lebens oder: zu Segantinis Motiv der Frau im Baum, Blicke ins Licht: Neue Betrachtungen zum Werk von Giovanni Segantini*, Beat Stutzer (Hrsg.), St.Moritz, 2009, S.106.
- 17) Guido Casinensis, *Visio Alberici: Die Jenseitswanderung des neunjährigen Alberich in der vom Visionär um 1127 in Monte Cassino revidierten Fassung*, Paul Gerhard Schmidt (Üb.), Steiner, Stuttgart, 1997.
- 18) Jacques Le Goff, *The Birth of Purgatory*, trans.A.Goldhammer, Scolar Press, Cambridge, 1984.
- 19) Quinsac, *op.cit.*, p.346.

